

## 1, はじめに

### (1) 教職大学院への志望動機

大学の教育実習を通して、教師の魅力を改めて感じたことと同時に、教師としての力量が不十分であることを実感した。「教師として子どもの前にあるときは、学力を保證できる授業実践力がなによりも必要である」という思いから、「学級づくり」「授業づくり」の両面から実践的に学ぶことができる教職大学院に進学した。

大学院の2年間で、指導技術や理論を様々な先生方から学ぶことができた。また、実践として行われた小学校・中学校での実習で、子どもや保護者・地域の実態に即した指導をはじめ、具体的な指導や支援方法を深く学ぶことができた。ご指導をして頂いた先生方に、心から感謝を申し上げたい。

### (2) テーマ設定の理由

私は自分の意見を持ちつつも、相手の立場に立って互いの良さを認め合える子どもを育てたいと思っている。なにより、学級づくりにおいても授業づくりにおいても「言葉」の教育は重要である。

子どもたちが互いに認め合える関係を築くためには、日々の授業や学級経営で「話す力」「聞く力」を長期的且つ系統的に育てる必要がある。学校サポーターでお世話になっている小学校の第5学年で、学校現場で学級づくりの面と授業づくり(国語の授業)の面からどう構成し、取り組むべきなのかを明確にしたいと思い、テーマ設定をした。

## 2, 「言語活動の充実」とはなにか

### (1) 「言語活動の充実」の重要性

平成23年度から既に小学校では実施されている学習指導要領の総則には、「児童の思考力、判断力、表現力を育む観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」(注1)と、「言語活動の充実」が教育課程の中心として示された。また、OECDのPIISA調査でも思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題などに課題が残されていることも事実である。

実際、実習中に言語力育成の必要性を感じる事が多々あった。自分の気持ちを上手に自分の言葉で文章にまとめることができない子、友人の意見を踏まえ、自分の意見を深めることができない子、グループ活動になると他の意見に流されてしまい、結局

意見が言えない子等がいた。コミュニケーションをとることができなければ、互いに認め合うことも出来ないのではないかと感じた。

子ども同士がコミュニケーションをとることができる言語力育成のために、学力を定着させるためにも「言語活動の充実」は重要である。

### (2) 到達目標と学習過程を明確に

「言語活動」と言えば、児童同士の話し合い活動や交流活動という印象が強い。実際、これらの活動は、学習指導要領が改訂される前から授業や学級経営で長年行われてきた。今改めて「言語活動の充実」が学習指導要領の改訂の要点となっている背景を考えると、子ども主体に置いた評価に対して曖昧な指導ではなく、活動により「どんな言語力が、どんな子どもに身についたのか」「どのように習得し、活用・探究に至ったのか」という具体的な到達目標・評価基準と共に学習過程を明確に指導していくことだと考える。

### (3) 中心は「論理的な言語力」

学習指導要領で「言語活動」の中で特に重点を置いているのが、論述・説明・要約・レポート作成、振り返り、討論・議論、批評、創作、読解力等「論理的な言語力・コミュニケーション能力」を育成するための言語活動である。論理的な言語力育成には、国語科を中心に学級経営や各教科指導、特別活動、委員活動等の場面にも規範意識や論理的な文表指導、話す聞く指導を行うことが重要である。

## 3, 本稿の目的と方法

本稿では『言語活動の充実』を中心とした学級・授業づくり開発」と題した。小学校第5学年の児童に学力の定着のために、「習得」「活用」の学習過程と身に付けるべき言語力を示した学級・授業づくりを、提案していく。

また、テーマに沿いつつ教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ中心に実習で何を学んだのか、学んだことが教師となったときにどう生かすことができるのか、①実習における実践の報告と省察、②教職大学院2年間で学んだことについて、③今後教師として働く際の目指す学級・授業づくりについて述べていく。

## 4, ポートフォリオの目次

教職大学院2年間の学びを、『学修の記録』(ポートフォリオ)として残した。目次は以下のとおりである。

I	イメージを描こう
II	学修を振り返る
III	授業科目を断片的視点から振り返る
IV	教師力向上実習について
V	描いてみましょう —理想とする児童生徒像・教師像—
VI	学校サポーター ・実習記録
VII	特別課題実習 現代的教育課題への対応力 ・計画書、実習記録、報告書
VIII	教師力向上実習Ⅰ 学級経営と人間性育成 ・計画書、実習記録、報告書・資料
IX	教師力向上実習Ⅱ 授業力向上とカリキュラム開発 ・計画書、実習記録、報告書・資料
X	教師力向上実習Ⅲ 同僚性・共同的学校経営、 教師力の確認 ・計画書、実習記録、報告書・資料
XI	多様なフィールド実習 ・計画書、実習記録、報告書

## 5. 教師力向上実習Ⅰ

### —スピーチ活動を通した心と体の育成—

#### 実践テーマ

豊かな心と健やかな体の育成  
—スピーチ活動を中心にして—

#### (1) 子どもの実態と実践のねらい

##### ①子どもの実態

対象は第5学年（5～6月）の児童である。朝と帰りの会でスピーチ活動を行っており、休日の過ごし方や友達と遊びに行ったことを意欲的に話す子どもが多い。しかし、スピーチに対する質問はほとんど同じ子どもしか質問をしない。また、隣同士で会話をしたり、机に肘をつく等姿勢が悪いままスピーチを聞いていたり、「聞く」姿勢ができていない子どもも多い。スピーチをすることはできても、スピーチが毎回5文以内で終わる子どもも多く、スピーチ活動に対して苦手意識をもつ子どもは、ただ「楽しかった」と表現することが多い。「もっと上手にスピーチをしたい」という子どもたちの意欲を大切に、相手に伝わるように「話す力」や「聞く力」を育成し、互いを認め合えるよりよいスピーチ活動を行いたいと考えた。

##### ②実践のねらい

実習の期間（5～6月）に、運動会が行われる。子どもたちにとっては、人間関係が確立できていない時期の運動会とあって不安も大きい。スピーチ活動を通して子どもたちが互いの良さを認め合える学級づくりをしたいと考えた。そのため

には、次のような力を身に付ける必要があると考える。

- (1) 自分の意見や思いが、聞いている人にも伝わるように話す（話す力）
- (2) 姿勢良く、話している人が一番伝えたいことは何かを考えながら聞く（聞く力）
- (3) 互いのスピーチの良さを認め合いながら、聞く（聞く力）

これらの力を育むことで、自分の話を聞いてもらえる充実感や、「仲間の意見をもっと聞きたい」「運動会について話したい」という意欲が高まることができる。運動会という行事と、スピーチ活動の両面から、豊かな心と健やかな体の育成ができ、「思いやりの心」「互いの信頼関係」を深める学級づくりに近づけると考えた。

#### (2) つけるべき言語力

上記の(1)②の3つの言語力を評価するために「習得」「活用」の段階に合わせて【表1】を設定した。(注2)

【表1】「話す力・聞く力」の段階

学習過程	つけるべき言語力	到達目標（評価基準）
習得	聞く力 正確に聞く	①正しい姿勢で、静かに相手を見て聞くことができる（聞く態度）。 ②相手が一番伝えたいことをキーワードでメモすることができる。
	話す力 伝えたいことを論理的に話す	①相手に伝わる話し方（声の大きさ、速さ、目線）をすることができる。 ②伝えたいことを論理的構成で組み立てることができる。
活用	聞く力 相手の発表に対して自分の意見を持ち、発信するために聞く	①初めて知ったこと、疑問に思ったこと、知りたいと思ったことを具体的に示すことができる。 ②相手のスピーチの良さが分かる。
	話す力 相手や状況に応じて話す	限られた時間の中で、伝えたいと思うことを効果的に伝えることができる。

上記（２）で挙げた言語力育成のため、次の指導を行った。

「自分の心を鍛えるためにしていること」  
「友達と協力してよかったこと」  
「友達のために努力して良かったこと」  
「その他」 の4つなかから1つ選択。

「〇〇〇—運動会を終えて—」

子どもたちにスピーチ原稿を書かせる前に、モデルスピーチとして教師の「友達と協力して良かったこと」を示した。スピーチは「はじめ・なか・まとめ・むすび」の論理的な構成し、話す速さ、目線、声の大きさ、間の取り方など子どもたちが実際スピーチするときの手本となるようにスピーチを行った。

スピーチ原稿に入る前に、テーマと具体的なエピソードを決める時間を取った。テーマのキーワードを9マスの中央に書き、キーワードから連想し、いくつか連想した中から書く内容を1つ選ぶという方法を行った。

を原稿上部に示した。  
これにより、全員書く  
ことができた。

「はじめ・なか・まとめ・むすび」の各段落の書く内容については、教師のモデルスピーチを原稿上部に全て例として載せた。

子どもたちが考え出した意見を「話し方」「聞き方」の「ルール」として学級全体で確認した。ただ、高学年のスピーチのルールとしてはもっと高い目標を持ってもらいたいと思い、担任の先生と相談し、次の授業のときに子どもたちが考え出した「話し方」「聞き方」のルールに、1つずつ新たなルールをつけ加えた。毎回スピーチをする前にルールを書いた紙を黒板に掲示し、「話し方」「聞き方」のルールを意識させていった。

– 43 –

#### ④スピーチのメモ、話す・聞く力の自己評価

##### 【聞く力 習得】①②，【話す力 習得】①

「スピーチカード（紙面の場合で割愛）」を作成し、スピーチをした仲間が一番伝えたかったこと（話題の中心）を必ずキーワードでメモをさせた。キーワードやメモの取り方について指導をした。話題の中心をキーワードで書くだけの子もいるが、印象に残った言葉等をメモしている子もいた。

「スピーチカード」には自分の聞き方・話し方を振り返ることができる自己評価の欄を作った。自己評価を毎回行うことで、「話し方・聞き方」を定着させていった。

##### 子どもが提案した「話す」ルール

☆は教師が付け加えたルール

①早口にならないように、話す。

②大きな声ではっきりと話す。

☆③一番伝えたいことが伝わるように、工夫して話す。

##### 子どもが提案した「聞く」ルール

☆は教師が付け加えたルール

①うなずきながら聞く。

②最後までしずかにしっかり聞く。

☆③話のポイントはなにか、注意して聞く。

#### ⑤聞いたスピーチに対して自分の考えを持たせ、意欲を高める活動「発見の実」「発見の木」

##### 【聞く力 活用】②

仲間のスピーチを聞いて分かったこと等を「発見の実」に書く活動を行った。上記の（3）④の「スピーチカード」に事前に滴型の付箋である「発見の実」（写真1）を貼って配布した。毎時間1人スピーチをしたら、1枚「発見の実」を書かせた当初は「発見の実」をどう書けばいいのか迷う子もいるため、教師が書いた「発見の実」の例をスピーチカードに載せた。

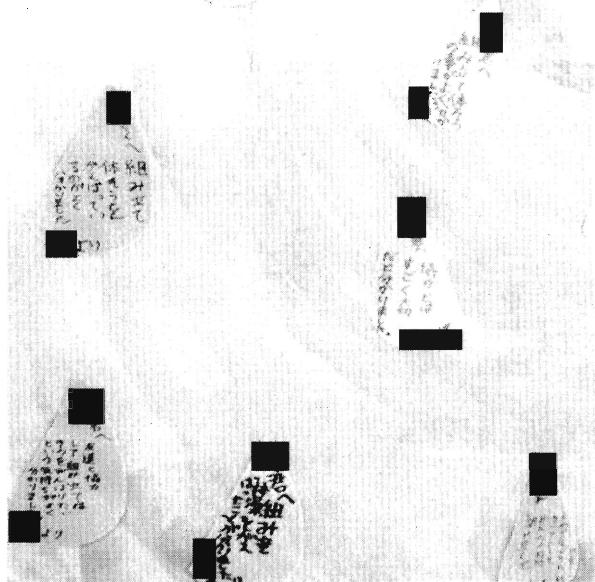
途中から「発見の実」を書くことに慣れ、早く書き終わってしまった子のために、「発見の実」に書いたことをスピーチカードにメモをして残しておけるよう付箋が貼ってある下にメモできる欄を設置した。

子どもたちが書いた「発見の実」は「実を貼った分だけ、学級全員の仲が深まる5年4組だけの木」である「発見の木」（写真2）に貼らせた。「発見の木」は廊下に掲示し、あえて実をバラバラに貼り、楽しみながら読めるようにした。「私のことが書いてある！」「こんな方法もあるよって教えて

くれた」等スピーチに対する感想を楽しそうに読み、話す子どもたちの姿が見られた。

##### 【写真1】「発見の実」

アドバイス等を書く子どももいた。



##### 【写真2】「発見の木」

「発見の実」を読んで話し合う子どもの姿が多く見られた。



#### （4）成果と課題

##### ①成果

ア、スピーチ原稿を書くことでつけることができる学力と意欲

教師のモデルスピーチを例示し、「はじめ・なか・まとめ・むすび」の論理的な構成の書き方を示した原稿用紙を使用した。文章を書くことが苦手な子どももスピーチ原稿一杯に文章を書

くことができた。書く力とリンクすることで、はじめて論理的構成で分かりやすく話す力が身に付けることができる。

イ、仲間のスピーチに対して「自分の考えをもつ」ことができた。

仲間のスピーチを聞いて、「発見の実」を書く活動と評価を通して、「自分の考えをもつ」大切さや意義を学ばせることができた。仲間の意見を受け入れることに加え、更に自分の考えを持つことで初めて充実した話し合いや交流ができる。

ウ、「話すこと」「聞くこと」の楽しさを実感させることができた。

スピーチ活動を振り返り、多くの子どもたちが「今までスピーチは苦手だったけど、初めて楽しくスピーチができた」「クラスの子について色々知ることができて嬉しかった」等スピーチすることの楽しさ、つまり「話すこと」「聞くこと」の楽しさに気が付いた。また、「自分の考えを聞いてくれて嬉しかった」等自分のことを知ってもらうことの安心感、喜びを感じた意見も多かった。

エ、仲間の「よさ」、仲間と繋がることの大切さと態度を育むことができた。

「発見の木」の「発見の実」を見て仲間の「よさ」「大切さ」に気が付いた等、スピーチ活動が人間関係に深く繋がる感想が多く見られた。そのため、運動会へのモチベーションアップすることができたと感じる子も多かった。仲間の意見を聞き、自分の意見を持つことだけではなく、更に伝え合うことで人と人が繋がりが深まる大きなきっかけができた。

## ②課題

ア、教科教育と繋がるスピーチ活動を

今回の実践は、学級づくりと人間性の育成を目的とされた実習の中で行った。スピーチ活動として教科とは別枠で行った。朝の会や運動会の練習も重なった時期で、限られた時間の中で細かく指導することの難しさを実感した。スピーチ活動単独で行うのではなく、言語活動の中心である国語科と連携して行うべきだったと考える。

イ、継続的なスピーチ活動ができる工夫を

今回の実践は、1か月集中して行った。しかし、継続的に行ってこそ「話す力」「聞く力」は身に付くものである。曜日によってテーマを変える、ビデオに録画をする等のスピーチ活動が継続的にできるような取り組みも必要である。また、継続的に子ども同士の交流の場をもてるように、スピーチ活動専用の掲示コーナーを設置し、「発見の実」に対する「返事」の付箋を用意しておく等の工夫

をしていきたい。

## 6、教師力向上実習Ⅱ

—スピーチ活動を生かした楽しい討論—

### 実践テーマ

「習得」「活用」の学習過程とスピーチ活動を生かした討論の授業開発  
—「豊かな言葉の使い手になるためには」

(光村図書、5年)—

### (1) 子どもの実態と実践のねらい

#### ①子どもの実態

対象は引き続き第5学年(10月)の児童。スピーチ活動を通して学んだ「はじめ・なか・まとめ・むすび」の構成を意識して作文を書く児童が多くなった。一方で、短時間で自分の考えをまとめ、進んで質問や反論をする子どもが少ない。また、学級活動でもなかなか学級としての意見がまとまらないこともある。「討論」を通して、個人の考えだけではなく集団としての考えも深め、まとめる力を育成したいと考えた。

#### ②実践のねらい

ア、第5学年で討論を学ぶ意義

上記の2(3)で述べたように、平成23年度から実施されている学習指導要領で、小学校高学年は「目的に応じて自分の立場から解説や意見、報告を書き、理由や根拠を示しながら説明することができる」とともに、自らの言語活動を振り返ることができる能力の育成が重視されている。小学校高学年に求められている「話す力」は、最終的には「討論する力」である。「討論」で具体的にどのように言語力をつけさせるのか、スピーチ活動を生かした「討論」の授業開発を行いたいと考えた。

第5学年で、「討論」を教えることで、「質問する力」や「助言・提案する力」、「説得する力」等の言語力を育むとともに、第6学年や中学校で行われる討論に対応した基礎的な学力を育むことができると考える。

イ、単元目標

本単元では以下の単元目標を設定した。

- (1) 話題を決め、収集した知識や情報を関連づけ、互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うことができる。(話すこと・聞くこと)
- (2) 自分の課題について調べ、意見を記述した文章を書くことができる。(書くこと)
- (3) 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつことができる。(関心・意欲・態度)

## (2) つけるべき言語力

本実践では、「習得」から「活用」の学習過程と各段階でつけるべき言語力を【表2】のように設定し、単元構成をした。(注3)

「習得」の学習段階では、「討論」に必要な「言語・非言語情報」の読み取り等を身につける国語科特融の言語力を、「活用」の学習段階では全教科に繋がる「論理的な文章を書く力」と相手に分かりやすく意見を伝え、聞き、質問や反論する「発信・交流」の力を身につけさせ、学習過程を明確にした討論の授業開発を行った。

## (3) 指導の流れとポイント

上記(2)であげた言語力を育成するため、以下の指導を行った。「討論」のテーマは、「豊かな言葉の使い手になるためには、どうすればよいか」でグループ討論をした。

### ①インターネットの検索方法、情報の要約や引用

#### 【習得】②基本学習

本実践では、インターネットや書籍から得た情報をもとに子どもたちは、自分の意見として討論用原稿を書き、討論の最初に発表する。そのために、教科書の情報収集する手段について学ぶためのコラム「インターネットで調べる」を活用して以下の5点にまとめて、ポイントとして指導をした。

- 1, インターネットで検索する際は、キーワード検索を用いる。文章で検索しない。
- 2, 誰がいつ情報を発信したのか確認する。
- 3, 引用する際は、制作者の名前や連絡先を、明記しておく。
- 4, 要約するときは、文章の要点をまとめて短い文章にすること。

### ②「討論」への関心を高める環境づくり

市内の図書館から、3種類の図書を借りた。①接客業を中心とした職業関連の図書、②ことわざや熟語に関する図書、③討論や発表に関する図書を約70冊借りた。借りた図書は、「豊かな言葉の使い手」コーナーとして設置した。「豊かな言葉の使い手」だと思う職業以外の図書を読み比べ、更に別の図書館で図書を借りる子どもたちの姿がみられた。また、保護者にインタビューをして、図書館の図書で調べるといふ子どももいた。

### ③論理的構成で討論用原稿を書く。

#### 【活用】①発展学習

実際討論を行っていく上で、ただ自分の意見を述べただけで意見や質問などができないという状態は避けたい。そのため、以下2つのステップで自分の意見を書く学習を行った。

- 1, B4サイズの学習シート(資料2)に、インターネットや図書で調べた内容をもとに論理的構成で自分の意見を書く。  
(この後朱書き)
- 2, 1を参考に、討論の最初に自分の意見として発表できる討論用原稿(300字程度)に書く。

インターネットや図書で調べたことから、いきなり討論用原稿を書かせるのではなく、調べ学習でどんなことを得たのか等を踏まえてB4サイズの学習シートに自分の意見を書かせた。

スモールステップとして次に、討論の最初で自分の意見として発表できるように、討論用原稿

↓【表2】「習得」から「活用」の学習過程と、各段階でつけるべき言語力

学習過程・段階		各段階でつけるべき言語力	「豊かな言葉の使い手になるためには」の評価基準(到達目標)
習得	①基礎学習	音読、話す・聞く態度や姿勢、漢字や語彙力等、すべての教科の基礎となる学習段階	①すらすらと正確に音読ができる。 ②漢字・語句の意味が分かる。 ③「豊かな言葉の使い手」について、詳しく調べたいことを決める。
	②基本学習	教科書・資料等の「言語・非言語情報」を正しく読み解く言語力をつける学習段階	④インターネットの検索方法が分かる。 ⑤インターネット、書籍等得た情報を理解し、要約ができる。 ⑥インターネット、本から必要な情報だけを引用することができる。
活用	③発展学習	「自分の考え・意見をもつ」「論理的に構成し、書く(『型』)」言語力をつける学習段階	⑦調べたことをもとに、「豊かな言葉の使い手」になるために自分なりにできることを考えることができる。 ⑧「はじめ・なか・まとめ・むすび」の構成で自分の意見を討論用原稿に書ける。
	④発信・交流学習	自分の考えを目的・相手・場面に応じて話す、聞く、論理的に伝え合う「交流・学び合い」の言語力をつける学習段階	⑨模擬討論を通して、グループ討論の流れを理解する。 ⑩論理的構成で書いた討論用原稿をグループ討論で仲間に伝える。 ⑪仲間の意見の良いところ、疑問に思ったところ等について質問又は反論することができる。
評価・一般化学習		学びの一般化、経験や生活に生かす「評価・振り返り・新たな課題追究」の言語力をつける学習段階	⑫①～⑪について振り返り自己評価することができる。 ⑬各教科の学習・日常生活に生かすことができる。 ⑭生活の中から課題を見つけ意欲的に解決することができる。

(資料1を討論用原稿に作り直した。紙面の場合で割愛)を書く活動を行った。「スピーチ活動」で使用したスピーチ原稿と同様に、討論用原稿上部に例となる文章も載せる工夫をした。

#### ④デジタル教科書の動画の利用、模擬討論

##### 【活用】④発信・交流学习

「討論」を行うことができるように「デジタル教科書の動画」と「模擬討論」を生かした2つの指導を行った。

1つ目の「デジタル教科書の動画」では、司会者などの役割分担や、簡単な討論の流れを確認した。

2つ目の「模擬討論」では代表4人を教師が選び、討論全体の流れを掲載した台本プリントを使用し、流れを確認しつつ進めた。どの子どもでも司会者ができるよう、全員に討論全体の流れと教科書に掲載されている例を載せたプリントを配布した。

#### ⑤「豊かな言葉の使い手になるために」の「討論」

##### 【活用】④発信・交流学习

実際「グループ討論」は、3回行った。1回目は、まず自分の意見(討論用原稿)をしっかりと討論する側、討論を聞く側にも伝えることができることを目標として定めた。また、司会者はどの子どもになっても、「討論」が行うことができるように当日教師が司会者を指名した。

#### ⑥「討論」後の交流・自己評価の討論用シート

##### 【活用】④発信・交流学习

自己評価を、討論をする側、討論を聞く側両方の討論用メモシート(紙面の場合で割愛)に載せた。討論の話し方・聞き方の自己評価を以下のように示した。

↓【資料2】B4サイズの学習シート 討論用原稿にいきなり書かせるのではなく、調べ学習でどんなことを得たのか等を「はじめ・なか・まとめ・むすび」の論理的構成で自分の意見をまとめさせた。

#### 話し方の評価

- ①自分の考え(意見)を先に言った後に、調べたことを述べましたか。
- ②積極的に発言しましたか。
- ③相手の意見を踏まえて、意見が言えましたか。

#### 「聞き方」の評価

- ①討論の邪魔にならないよう、静かに姿勢よく聞くことができましたか。
- ②相手が何を伝えようとしているのか、意識して聞くことができましたか。
- ③話のポイントやキーワードに気をつけて、メモを取ることができましたか。

毎時間評価することによって、「次回はもっと意見を言いたい」「姿勢にも気をつけないといけな」と意欲的に取り組めるようにした。相手の意見とともに自分の意見もキーワードでメモしている子どもを評価した。

#### ⑦学習の振り返り(評価・一般化学習)

単元を通してどのようなことを学んだのか、子どもが自覚できるように学習の振り返りを、振り返りシート(紙面の場合で割愛)を使って行った。学習の感想として、①「グループ討論」をする前と後で、「豊かな言葉の使い手」になるために自分なりにできると思うことの変化、②「豊かな言葉の使い手」になるため、改めてこれからしていきたいことについて書かせた。

振り返りの文章も発表させ、学んだことのキーワードを使って理由も一緒に書けた子どもを評価した。

【資料2】B4サイズの学習シート 討論用原稿にいきなり書かせるのではなく、調べ学習でどんなことを得たのか等を「はじめ・なか・まとめ・むすび」の論理的構成で自分の意見をまとめさせた。

【資料2】B4サイズの学習シート 討論用原稿にいきなり書かせるのではなく、調べ学習でどんなことを得たのか等を「はじめ・なか・まとめ・むすび」の論理的構成で自分の意見をまとめさせた。

【資料2】B4サイズの学習シート 討論用原稿にいきなり書かせるのではなく、調べ学習でどんなことを得たのか等を「はじめ・なか・まとめ・むすび」の論理的構成で自分の意見をまとめさせた。



#### (4) 成果と課題

##### ①成果

ア、「討論」の学習を通して、「発信・交流」することの楽しさを教えることができた。

授業の感想を見ると、「質問や意見が言えるようになって楽しかった」「相手の立場を考えて、意見を言うことの大切さが分かった」「司会者は難しかったけど、他の授業でも生かしたい」という子どもが多かった。

「討論」を教えることで、子どもたちは互いの立場を意識して意見を交流することの楽しさを発見し、他教科の授業の話し合いでも生かすことができることが分かった。

##### 【写真3】討論時の様子

聞く側も積極的に質問をしていた。



イ、「スピーチ活動」を生かした討論用原稿の学習ができた。

「スピーチ活動」で学んだ論理的構成を意識して全員が討論用原稿を書くことができた。自分の意見を2つのステップで書いたことで、意見をまとめることができた。

論理的構成で書くことに慣れた子どもからは、「もっと聞いている人が納得してしまう文章を書きたい」「討論用原稿にまとめることで自分の意見がはっきりすることができた」という意見が多かった。

また、書くのが苦手な子どもからは、「意見が分かりやすくなったと言われた」「書き方に慣れてきた」等今後の意欲に繋がることができた。

ウ、「習得」から「活用」までの段階を踏んだ学習過程の効果を実感。

上記の【表2】の各段階を踏んだ学習過程で学習を進めたことで、子どもたちの実態に合わせて基礎的な「理解」から発展的な「発信・交流」までを身に付けさせることができた。各段階でつけるべき言語力を明確にした学習過程で進めていく

ことで、論理的構成の定着や「交流・話し合い」に対する積極性や意欲、他教科で活用する力を伸ばすことができると考える。

##### ②課題

ア、デジタル教科書の動画の活用方法

上記の(3)④で、デジタル教科書の動画を「討論」の簡単な流れを確認する上で使用したが、動画を見る上での観点を示さなかったため、子どもたちは、ただ動画を見ているだけになってしまった。

学校では、デジタル教科書の使用が増えている。デジタル教科書の動画を使用する際、ただ見せるだけではなく、動画を見る前に子どもたちに必ず見る観点を与え、思考できる場を設ける授業構成をしていきたい。

イ、「討論」後の全体での振り返りの実施化

「討論」を行った後、討論用メモシートの自己評価に加え、クラス全体で「今日の『討論』でどんなことを学んだか」「次回の『討論』に向けて取り組みたいこと」を発表させる予定だった。しかし、討論用メモシートの自己評価だけで終わってしまった。

「学んだこと」「次回へ向けて取り組みたいこと」を「討論」後にまとめさせることによって、本時の学習内容の確認ができる。また、クラス全体で発表し合うことで討論をする側も討論を聞く側も情報交換や発見を伴った学びとなり、学習意欲を高めることができる。毎時間の振り返りを大切にしていきたい。

#### 7. 2つの実践を通して学んだこと

—「言語活動の充実」を中心とした学級・授業づくりとは—

##### (1) 教師の「言語力」の再考

1つ目の実践で、モデルスピーチやスピーチの原稿用紙の上部の例を、話の内容を真似して書く子どもが多かった。何気ない会話でも、教師が構成を意識した話すことで、子どもは話の構成に気づき、定着することができる。

教師の「言語力」が低ければ、子どもの「言語力」は伸びない。教師自身が、論理的に話す力や論理的構成で書く力等の言語力を正しく身に付ける必要があると改めて感じた。

##### (2) 学級経営と授業づくり両面からの指導

2つの実践を通して、学級経営と授業づくりどちらか偏った指導をしても、子どもの学力つまり「言語力」を育成することはできないと身をもって感じた。「学級経営」は、土台となる人間関係やコミュニケーション能力、学級規律、言語力と人間性の基礎



を育む場である。「授業づくり」は、学級での話し合い活動や班活動を結びつけることで、学んだ言語力を定着させることができる。

学級経営と授業づくりの両面から総合的に指導・支援をすることで「言語力」育むことができると考える。

## 8. 教職大学院の2年間で学んだこと6項目

### (1) 学級経営一寄り添い、信頼関係を築く力—

#### ①子どもに寄り添う姿勢の大切さ

学級には様々な子どもが在籍している。発達障害を抱えている児童、外国人児童、不登校等課題は幅広く、深い。これまでの実習で、私たち教師の対応や言葉かけによって、子どもの学校生活を大きく変えることができるのだと学んだ。

また、様々な子どもたちの悩みや考えを受け取り、指導という形で返し、子ども同士でも互いを理解し合うことができる学級づくりを常に心掛けていきたい。

#### ②保護者との連携

指導をする中で、保護者との連携は必要である。実際、実習で、「保護者から信頼されなければ、児童への指導も意味がなくなってしまう。学校からの電話という保護者は何か悪いことをしたのかという気持ちになる。日頃から児童が頑張っていることや良かったことを伝えることが大切だ。」と教えて頂いた。

学級通信等で教師の願いや思いを伝える、電話や連絡帳で子どもの様子を伝える等、子どもの成長を共に支えていける関係を日頃から心掛け、築いていきたい。

### (2) 授業づくりーゴールを明確にした授業—

#### ①明確な評価基準の設定

実習中、「1時間の授業で、どんな力をつければゴールなのか」等、評価基準を明確に設定することの大切さを改めて感じた。明確な評価基準で、子どもの学力を正しく把握し、課題を発見することができる。国語科以外の教科においても明確な評価基準を設定し、子どもの学習意欲を高めることができるよう行いたい。

#### ②系統的な観点を持ったカリキュラム開発

2つ目の実践では、第6学年で学習する「学級討論会をしよう」があることを子どもに伝えたところ、更に意欲的に取り組むようになった。

各教科、学年間を通しての系統的なカリキュラム開発の力は未熟である。しかし、子どもに合った「習得」「活用」の学習過程を構成し、カリキュラム開発

を行っていききたい。

### (3) 学校経営ー連携を活性化—

#### ①学校内での教師の連携

平成23年度から実施されている学習指導要領の中で、教科間や学年間における系統的な学力を示す必要がある。教師1人が全教科の系統性を考え、実践していくのは難しい。実習校では、校外の研修会等で学んだことを定期的に発表され、研修に励んでいた。

教師間の連携がなければ、学校教育は成り立たない。先生方の学ぶべきところを、自分から積極的に学び、一步一步成長していける教師になりたいと思う。

#### ②地域との連携

学校サポーターでお世話になっている小学校では、地域との連携にも力を入れている。読み聞かせのボランティアでは、定期的に保護者が1人ずつクラスで読み聞かせを行っている。また、休日に行われている土曜教室では、地域の方々が講師となって、教室等を利用して生花教室等の講座を定期的に開講している。

地域との連携は、ただ学校が声をかけるだけでは成立しない。学校や教師の日々の取り組みが地域に認められてから初めて連携と呼べる。挨拶を欠かさず、日々の登下校指導や、地域の行事等、地域と積極的に関わっていききたい。

## 9. おわりに

### (1) 互いを認め合うことができる学級づくり

学級には様々な個性をもった子どもたちが一緒になって学校生活を送っている。発達障害を抱えている児童、外国人児童等「異なるところ」ばかりに目を向けず、相手の「個性」や「魅力」と捉え、互いに「認め合える」子どもを育てたい。

今回の実践のように「言語力」育成に力を入れて、互いの魅力を享受し、相手の立場に立って行動できる子どもを育む学級づくりに取り組みたい。

### (2) 楽しく意欲的に取り組める授業づくり

これまでの実習で、子どもに身に付けさせたい力等を明確にした授業構成を常に意識していた。しかし、「子どもが楽しいと思える授業をつくるのは大切である。しかし、子どもだけではなく教師も楽しいと思える授業をつくらなくては、子どもたちは当然授業を楽しみとは思わない」と先生からご指導を頂いた。

教職大学院で学んだ教材研究の方法や授業構成、評価基準や発問の仕方等の授業技術を生かし、子どもが楽しく、意欲的に取り組める授業をつくっていききたい。

### (3) 常に積極的に学び、成長する教師に

大学院2年間で「子どもは教師が思っている以上に教師を見ている」ことを実感した。実習中、自分が授業中述べた言葉等について「あの言葉、とっても良かった」「先生の言葉に元気をもらった」等子どもは教師の言動を見ている。

実際、子どもの言動は教師の言動によって大きく変わる。子どもができなかったことは、教師の力不足と反省をし、子どもから学んだことを、授業や学級経営で生かし、成長し続ける教師でありたいと思う。また、受け身ではなく積極的に先生方の実践を学ぶ姿勢を忘れずに、教師としても子どもの見本となれる教師になりたい。

### 【注記】

注1 文部科学省『小学校指導要領解説 総則編』

注2・3 佐藤洋一先生の「学習過程論」を基に、半田が作成したものである。

佐藤洋一『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル1～4』(明治図書・2011.10)

### 【主な参考文献】

#### 1. 学習指導要領関係

- (1) 文部科学省『小学校指導要領解説 総則編』
- (2) 文部科学省『小学校指導要領解説 国語編』
- (3) 文部科学省『中学校指導要領解説 総則編』
- (4) 文部科学省『中学校指導要領解説 国語編』
- (5) 「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」(文部科学省・2010.12)

#### 2. 「言語活動の充実」に関わる文献

- (1) ドミニク・S・ライチェン, ローラ・H・カルガニク編著 立田慶裕監訳『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』(明石書店・2006. 5)
- (2) 小森茂『なぜ「言語活動の充実」なのか』(明治図書・2011.4), 大熊徹『小学校国語科「活用型学習」の授業モデル』(同・2009.8), 同『中学校国語科「活用型学習」の授業モデル』(同・2009.8)
- (3) 佐藤洋一「言語活動の充実 教育課程の基本的枠組みと教育内容の主な改善事項」(『教職研修 2008年2月号』教育開発研究所・2008.1)
- (4) 菱村幸彦『戦後教育はなぜ紛糾したのか』(教育開発研究所・2010.8), 藤原正彦『日本人の誇り』(文春新書・2011)

#### 3. 学級づくりに関わる文献

- (1) 佐藤洋一「できる・発見・学びの共有と自覚化」(『授業研究 21』明治図書, 2008. 2)
- (2) 鈴木健二「しっかり話す力の鍛え方」(『小学

校学級経営 57』明治図書・1990.11)

- (3) 鈴木健二「思わず聞きたくなるスピーチ術」(『小学校学級経営 5月号臨時増刊 51 知的で楽しい学級マニュアル』明治図書・1990.5)

#### 4. 国語科の授業づくりと評価に関わる文献

- (1) 国語教育研究所編『読書力』を育てる授業改革(『国語教育臨時増刊』明治図書・2010.3)
- (2) 佐藤洋一「討議を深め、きたえる言語力と評価を」(『授業力&学級統率力』明治図書・2011.10), 同「『聞く』『要約』『レポート作成技術』を全員に」(『教育科学国語教育』明治図書・2009.11), 同「『個性』を語るスピーチ学習の基礎・基本」(『国語教育』明治図書・2001.4), 同「『メモ・聞く』指導と評価—基礎基本から交流へ—」(『国語教育』明治図書・2001.5), 同「コミュニケーションの『モデル学習』—主体的な発信・交流の基礎基本—」(『国語教育』明治図書・2001.5), 同「自己・他者と向き合う力としての『説明力』」(『国語教育』明治図書・2007.8)
- (3) 左近妙子「『説明力』は、コミュニケーション能力の一部である」(『国語教育』明治図書・2007.8)

### 【付記】

大学院2年間の実習は、以下の学校でさせて頂いた。

学校サポーター, 教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ

一宮市立貴船小学校(森義朗校長先生)

特別課題実習

豊田市立東保見小学校(新美隆一校長先生)

教師力向上実習Ⅲ

大口町立大口中学校(田中将弘校長先生)

実習中は、多くの先生方にご指導ご助言を頂きました。本来ならばお一人ずつお名前をあげるべきですが、頁数の関係もあり省かせて頂きます。お世話になった全ての諸先生方に、心から感謝申し上げます。

また、最後になりましたが、学校サポーターで継続的にご指導して下さいました佐藤洋一先生、教師力向上実習Ⅰ, 教師力向上実習Ⅱでご指導して下さいました佐藤洋一・鈴木健二先生、教師力向上実習Ⅲでご指導して下さいました佐藤洋一先生、修了報告書や国語科の授業づくりを具体的にご指導して下さいました佐藤洋一先生、本当にありがとうございました。